



5 月 号

昭和58年5月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

校内の全緑地が九つの通学団の森に分かれている。西町通学団には旧東海道松並木があることから「街道の森」と名付け、松並木など、その特色をもちこんでいる。

一人一鉢、一人一本ツバキ栽培、親子さし木活動、親子美化作業、姉妹学級清掃、親子造形会等、親子・教師同汗の活動は本校教育の特色である。



(みどりを育てる子ら—男川小)



生きた教育にも注視

稲垣 正 明

—教育随想—

現在の学校教育は生きた教育に相違ないが、私が敢てここに生きた教育に注視と題した所以のものは、教育とは学校内の学習のみが教育でなく、学校外の教育も軽視してはならないと思うからである。

昔から「百聞は一見にしかず」という言葉があるが、正にその通りで（言葉で何度聞いても、その実体はつかめないが、一度自分の目でその実物を見ると、はあ、これがそうかと初めてその実体を知ることがができる。

学校で生徒の皆さんを近くの海や山に連れて行くこと、名勝旧跡を訪れること、東京・大阪・名古屋、その他の都市を見物することがそれである。

たとえば、名古屋を訪問するについては、市役所に連絡をとり、係の人から十

せてもらい、話の種にするなど岡崎人としては結構ではないか。

それから私は多年、紙に関係しておったので、紙についてちよつと申し述べさせてもらおう。

現代の高度に発達した世界文明は人智と紙によって築き上げられたものである。紙なくして文明はあり得ない。

皆さんが毎日親しんでおられる教科書、参考書・ノート・雑記帳・新聞・雑誌等、紙による恩沢の如何に大なるかを認識していただきたい。

現在、アメリカは世界第一の紙の生産国になっている。日本が四、五年前、カナダを追い越して世界第二位の紙の生産国となり、世界に誇る経済大国となつたのも、紙の恩恵によるところ大なるものがある。この紙がどうしてできるかを今の生徒たちは常識として知っておく必要がある。

愛知県下では、名古屋に近い春日井市に戦後できた王子製紙の春日井工場がある。この工場は日本でも最新式の設備を有し、長綱抄紙機数台が運転している。実に壯観である。見た人は誰もびっくりするであろう。

もし、工場見学がご希望の際には、私にお話ができれば、春日井工場長に私が紹介致してもと念じている。とにかく、百聞は一見にしかずで、高学年の生徒にはこうした生きた教育もよろしいかと思う。

（紙業日日新聞社会長）

甘言
苦言



「くん」と「さん」

元梅園小学校長

山本 甚 一

わたしの家の近くに、かわいいマルチーズが二匹飼われている。雄は「くん」雌は「さん」。そのあごをなでてやりながら、ふと、人間社会の「くん」や「さん」について思うことがある。

作家井上ひさしによると、「敬語はいまだ御壯健であらせらるる」そうであるが、果たしてどうであろうか。近ごろ、女高生が互いに呼びすてにしていたり、小さな女の子が「ぼく」と自称している場面によく出会う。学校でも、男の教師が女の子をも、女の教師が男の子を「くん」呼びわりする。なお、教師同士が、同僚を〇〇先生などと呼びあつて、一向にはばかる様子もないようである。

「くん」は同僚や目下の人を呼ぶ敬称、
「さん」は「さま」より程度の低い敬称である。それに、男は男には「くん」女には「さん」を、女は男にも女にも「さん」をつけて呼ぶのが本来である。これは、児童生徒・児童生徒間でも、教師・児童生徒間でも、教師・教師間でも全く同じである。この本来の姿を見失つてい



岡崎のナイチンゲール

武田ミネ子さん
五反田米子さん

岡崎市民病院には、総婦長さん、二人の副総婦長さん、十人の婦長さんをはじめとして、総勢三百十八名の看護婦さんがおられると聞く。

わたしたちは、総婦長の石川さんにお会いし、この道一筋にご活躍の代表的な方を紹介していただいた。手術室婦長武田ミネ子さんと救命センター病棟婦長五反田米子さん。婦長という肩書きから、なんとなく気むずかしくいかめしい人ではないかと気になったが、若々しく笑顔で会ってくださった。

おふたりとも、昭和二十九年に中学を卒業。ただちに市民病院附属看護学院に

入学し、昭和三十一年に卒業した同期生の由。以来今日まで二十七年間市民病院看護婦として勤務。この間に、ともに結婚され子どもを育てながら、武田さんは市立看護専門学校（三年）とNHKの高等学校通信教育（四年）を、五反田さんは岡崎高校定時制（四年）と市立看護専門学校（三年）を卒業された努力家である。

今日まで看護婦という仕事が続けられたことについて、次のように話された。「主人をはじめ、家族の協力があつたこと。近所の人たちが、子どもの面倒を含めて温かく接してくれたこと。もう一つは、同じ年に中学を卒業し、一緒に市民病院に勤めて以来、どんなことでも話し合いの励まし合うことのできたわたしたちふたりの仲が、ここまでやってこられたものと思います。友達、助け合える友達をもって幸でした。」

看護婦という職業については、「子どもの頃からなりたいと思っていた仕事なので、辛いこともありませんが、いやだと思ったことはありませんでした。」「なんの取り柄もないわたしが、健康だけを資本にして患者に喜ばれる、こんなすばらしい仕事はありません。」

「患者が痛みで苦しむことがあったり、たとえ悪い結果となっても、患者や家族の方から、喜んでいただける看護婦になりたい。」

と、献身的なことが返ってくる。

昭和二十年に小学校に入学したので、

食糧難で苦しんだが、みんなで助け合ったことをしみじみと話され、今の教育として、

「受験などで思うようにいかなかった子、困っている子、苦しんでいる子をいたわり慰めてやる思いやりのある子どもを育ててほしい。」

「親がまじめに生きているところを見てくれば、子どもはきつとわかってくれるし、思うときがあるのでは……。」と、いくつかの問題についてご自分の過去の姿と重ねつつ淡々と話してくださいました。

人間としてどうあるべきか、考えさせられる一ときであった。教師として納得のできる生き方をしたいものだと思いつながら、さわやかな気持ちで市民病院を後にした。

武田ミネ子 岡崎市伊賀新町、昭13.4.24生
五反田米子 岡崎市岩津町西坂、昭13.4.10生



武田さん(右)と五反田さん(左)

るのではないかと。

この「くん」「さん」を正すことが、やがて日本語を正すことになろうと思う。

昔、敬語の指導者だった

矢作北小学校長

細井浩平

春休みに、ある喫茶店へ入った。コーヒーを持ってきたウェイトレスが、「ミルク入れますか。」と私に尋ねた。見ると、女子大生のアルバイトだった。M中学で私が国語を教えた子だ。

「ます」「です」「ございます」等の丁寧語は、話し手自身が丁寧さを示すためのことばであるとされている。しかし、話し手の表現の丁寧さを示すだけではなく、相手にその丁寧さを強要したり、押しつけたることが問題になる場合がある。「ミルク入れますか」この場合の「ます」は、言われた方にとって、必ずしも嬉しいものではない。「ミルクをお入れたしませうか」「ミルクはいかがですか」という表現の存在を意識できる人間にとっては、なおさらである。

「ます」が付きさえすれば、丁寧であり、相手に対する敬意を示すという考え方は、普遍性、妥当性を欠くものである。「先生、また来てね。じゃあ、さよなら。」

ああ、私は、昔、敬語の指導者だった。「先生、また、いらしてください。失礼します。」を、二度三度、心の中で繰り返しながら、複雑な気持ちで店を出た。

教育者の精神

角 谷 源之助先生撰
後 藤 三 郎 補

富貴榮達を求めむと欲するものは宜しく去つて他に求むべし。教育の事業は必ずしも富貴榮達を得る所以の道にあらざるなり。

(それただ至誠を推し正道を踏み、知己を百歳の後に求め、能を長じ不能をあはれみ) 一簞の食一瓢の飲(も)子弟と共に之を飲み之を食ひ、喜ぶ時は即ち俱に之を喜び、悲しむ時は即ち共に之を悲しみ、敝袍以て我が心を煩はすに足らず、陋巷以て我が意に介するに足らず、心広く体胖かに、徐に後進の成徳達材を待つ、天下の樂之より大なるものなし、又何をか求めむ。

語に曰く、富貴も淫すること能はず、貧賤も移すこと能はず、威武も屈すること能はず、これ

を之れ大丈夫と謂ふと。(教育者も亦時に困厄に陥ることなしとせず。誘惑に会することなきを保せず。)それ守ることかくの如く堅く、志すこと彼が如く篤きにあらずんば、奚ぞ能く長へに斯道の神聖を保持し、俯仰天地に愧ぢざることを得むや。

光陰は矢の如く国運は日に新なり、(畏けれども)聖旨を奉じ、揣らざれども神国の幹を以て任じ、我が頭霜を戴くも我は学んで厭はざるべく、我が齒既

に落つるも我は誨へて倦まざるべし。(仰いで国を思ひ、俯しつて子弟を見、)憤を發して食を忘れ、楽しんで以て憂を忘れ、老の將に至らむとするを知らず。これ豈教育者の本領にあらずや。

(資料提供 梅園小長 荻野 富義氏)

『教育者の精神』は、昭和十三年、愛知県岡崎師範学校が後藤校長の提唱で、学生のために編集した冊子「心の鏡」(B六判六五ページ)に採られたものである。成句出典は孔孟の教えに遡るものが多い。また、時代の影響を受けて国粹主義の思潮を盛り込んでいることも否めない。

今日の教育理念に照らしてみても、否定すべきを否定するは当然としても、なお残る部分に、人として教師としてのあるべき普通の姿が多く示唆されていると受けとめることができよう。

古人の跡を求めず、その求めたるところを求めよ、とは先哲の言。あえて紹介する意図もここにある。(編集部)

「敬愛堂」の想い出の中に

緑丘小学校長 足立 誠

でき上がったばかりの「敬愛堂」は、木の香も漂う四十坪ほどの建物でした。昭和十三年四月、師範学校に入学生した私どもは、時折ここに出かけては学友と寝起きを共にしたものです。場所は現在の井田小学校の東端にあたるでしょうか。当時、その辺りは人里離れた雑木林のただ中で、聞こえるものは、虫の音や小鳥の声に、松の葉をかすめる風の音くらいなものでした。近くには、やせ山を少しばかり開墾して桃の苗木が植えてありました。昼はここで鎌や鎌を手にとり、夕暮迫るころには「敬愛堂」に入つて入浴

し、夕食をとりました。夜も更けるころは、松風の音を聞きながら、坐机を並べて学習したり、学友と語り合つたりしました。時には坐禅をくみ、「心経」を唱えたりしました。この「教育者の精神」もここで語じたものでした。

「富貴榮達を求めむと欲するものは宜しく去つて他に求むべし……一簞の食一瓢の飲も子弟と共に之を飲み之を食ひ……敝袍以て我が心を煩はすに足らず、陋巷以て我が意に介するに足らず……天下の樂しきより大なるものなし……」

それは青年期の私にとつてまばゆいほどの理想として心のひだにくだり込んできました。この一文を語るときに、教師への道を歩むことへの希望と信念をかきたてられる思いでした。それは、理想主義、人格主義を志向する当時の思潮がこの文章をも貫いていて、血の気の多い私どもを魅了したものでありました。

長与善郎の「竹沢先生という人」に「いったい人間の価値というものは、その人の言行が一致しているかないかで決するものではない。その理想の高きによることだ。人間の人間らしい味は、その矛盾と理想への永遠の努力の中に出てくるんだ」という一文があります。この中に矛盾を内臓しながらもなお理想を追い求めて、教職への誇りを矜持するその気概というものは、いつの時代になろうとも、かわらずに持ち続けたものだ、しみじみ思うこのごろです。

女教師として

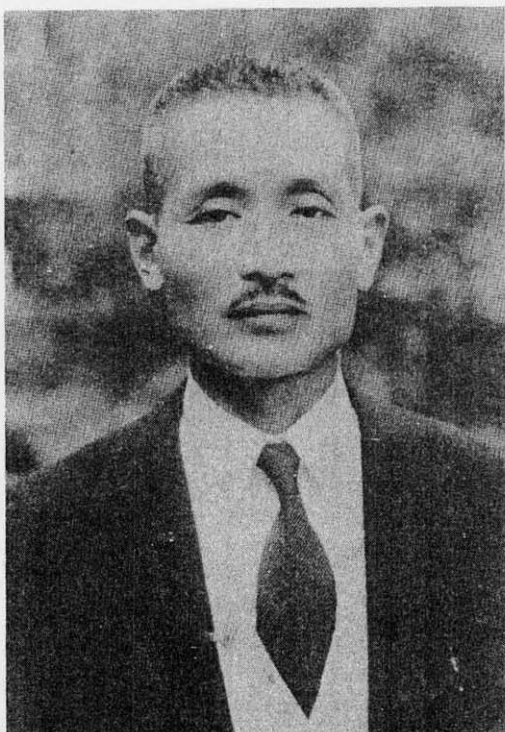
城北中学校 朝雄 伸子

全国的に女子職員が増加する傾向にある今日、学校における女教師の活動がますます重視されています。そのような現在、私は、「あっ」と言う間に過ぎ去った女教師としての自己の生活をふりかえってみました。

新任教師の頃は理想に燃えて、自分は先輩の女の先生方にも、男の先生にも負けないぞと意気込んで教師生活に入りました。

ところが、だんだん経験を経るに従って、教科指導の面で困るようになり、一年に何回となく研究授業を行いました。教材研究の面からの批評はもちろん、教師の教室での位置、言葉の使い方、設問の仕方など細かい指導をしていただきました。また、時々母が生徒の父兄の授業参観にまじって授業を聞きにきて、注意をしてくれたことも忘れられません。「あまり声が高すぎるよ。板書の字ははいねいにね」など、今でも授業をしながらか、母の声が聞こえるようです。

そして、三十数年経った今、考えてみると、二十代は専門職としての充実期、教科指導の探究をし実力を身につける時代でした。三十代は過渡期で、家庭を持ち、家事、育児などに負担がかかり、職場をとるか、家庭をとるかという岐路に立た



愛知県岡崎師範学校長(昭10~昭14)
後 藤 三 郎 先生

教師としての反省

矢作北中学校 中山 昌司

されました。そんな中で私は教師と主婦との両立をはかるのに懸命でした。四十年代から五十代にかけては経験を生かし、責任ある行動をとらなければならぬ立場に立たされました。責任ある行動といっても女教師は、やはり男性とは違うところがあつて、一つの時代になつても、女性らしく、やさしさ温かさを持ち続けるべきだと、今は思います。

現在、中学校の教育は一部に荒れすぎている生徒を抱え、岐路に立たされているといわれますが、その解決にも、父性的な指導力と、女性教師の母性的な細やかさ、温かさが一体となつた教育が必要なのではないでしょうか。

私は残り少なくなつた教師としての最後の時期を、このように愛情ある女教師として過ごしたいと思つております。

代は、わが国が高度経済成長を続けていた時期でした。しかし、就職はまだ決して楽な時ではありませんでした。このため、新卒での赴任校は山間辺地の小さな学校でしたが、決断していやな気持ちにはなりません。今思うと、故郷遠くはなれて辺地に赴任した新卒の体験が教師として長くプラスになつたようです。

最初に担任した五年生は、わずかに十四名でした。山間地域の子どもたち独特の純真さに、つい心を引かれました。子どもとの生活は、まさに「喜ぶ時は即ちともにこれを喜び、悲しむ時は即ちともにこれを悲しみ……」の心境で毎日過ごすことができました。

教師としての経験が長くなるにつれ、教育実践での技術的な向上はみられたかもしれないが、長年の慣れで、つい形式的・事務的に陥りがちになりました。そんな時、大きな力になつてくれたのが、先輩であり同僚です。教育を通じて、ともに苦しむ中で、新しい希望を与えてもらうことができました。そんな時は新卒当時に味わつた教師としての生きがいとは、またひと味違う喜びでもありました。

こうした時期を経た後に、「富貴榮達を求めんと欲する者は、宜しく去つて他に求むべし。……後進の成徳達材を待つ……」ということばに接しました。改めて先輩の教育者精神に感銘するとともに、鞭打たれた思いがし、自らを謙虚に反省し、決意を新たにす次第です。

読み声の中に

常磐小 松井 伸市

足の裏を床につけ、教科書を両手でしっかりと持っている。左手の人差し指は、次のページにはさみ、めくりやすいようにしてある。全員、いすを少し後ろに下げ、自分の番が来たら、音をたてないで立てるように準備されている。

「にじとかに。つぼたじようじ」題名から読み始める。シーンとして読み声だけが教室に響く。音読を中心とした授業づくりを求めて四年。国語の時間にはいつも見られる光景である。しかし、子供たちの読み声の中には、一人ひとりの思いがあり、教師と友達と親とのさまざまな触れ合いがある。

A君は障害児である。話すことはとも読む声もはつきりしない。「これはへんだなあ。……」この一文がなかなか読み終わらない。しかし、A君が一生けんめい読む声をじつと聞きとり、最後まで待っている学級の仲間たち。小さな声で教えてあげているとなりの席の子。A君を温かく見守っている思いやりの心に触れることができた。



B子の読み声が前時に比べ一段と大きくなり、自信に満ちていた。読み終わった後は、みんなから拍手された。授業の後、B子に聞いてみた。

「じようずに読めるようになったね。家でも練習したの。」
「うん。三回読んだ。そしたらお母さんが聞いていてね、『うまいね。』ってほめてくれたもん、もう二回も読んじゃったんだよ。」

母と子、家庭の温かさと親子の触れ合いを感じた。

「両手をおろすのにじがきえちやうよ。……」

この一節を読んだ時、C子の目がきらりと光り、顔がウフフと笑った。教師の視線とC子の視線が一瞬ぶつかり、にやりと合った。C子はこのお話のお

もしろさをつかんだ。本に読み浸っているなと思えた。C子のやる気を感じた。

音読は子供たちにとって、わかりやすく確かな言語の力をつけるのに有効な活動であると思う。子供たちは読むことが大好きである。読み声の中にこめられている一人ひとりの願いをくみとりいっそう、心の触れ合いを図りたい。

教育日々



陶像づくり

竜海中 山本 光昭

「高さ八十センチ、直径三十センチの頭像を焼き物でつく。グループ製作だよ。」

と言って、作業に取り組み始めた。正直言って、私自身この大きさの焼き物をつくるのは初めてで、自信がなかった。各学級を六班にわけ、八学級、四十八の作品が、すべて成功するとは思わなかった。

高浜市の業者に相談したところ、

「中学生ではまず無理でしょう。でも、どうしてもやろうと言うなら、協力してあげよう。」と言ってくれた。

なんとかなるだろうと思い、生徒にぶつけてみた。ところが、生徒たちは、不安と期待の面持ちから、やがて、グループ製作に対する反応を示したのである。そこで、まずテーマを考えさせた。

できたものは「善と悪」「心の中の顔」等、内面の表現が多く、アイディアスケッチの段階では大きさに対する実感がなかったのである。まだ生徒たちには切実感がないのである。

いよいよ粘土をつみ始めたとき、生徒たちの顔が変わった。二時間かかっても二十センチも積めない。手にあまる太さの粘土ひもをかかえて、悪戦苦闘している。でも、今こちらが手を抜いてはだめだ。彼らがどんなに苦労をしても、粘土の厚みや大きさの合わない班にはやりなおしをさせる。でき上がってくる



につれ迫力が出てきた。半分ほど積み上げたところから、ペースがあがり、生徒たちは生き生きと全体で動くようになってきた。しかし、ついに一学期が終了。このまま二学期まで放置してはおけず、夏休み中も製作を続けることにする。八月七日になり、ようやく作品は完成。この日は約二時間かけた。この時の喜びは今までの苦勞をふきとばすものであった。

作品がいよいよでき上がった。なかなか素晴らしい。しかも作品の全部が満足いく形で焼き上がっている。

芝生の上に展示し終わった時の頭像の表情は、どの顔も満足そうであった。五十キログラムをこえる作品を抱きかかえるようにして運んだあの生徒たちの真剣な顔は、いつまでも忘れることはないであろう。



常磐南小と男川小が特選校

学校林活動と学校環境緑化で

国土緑化推進委員会主催の昭和五十七年度全日本学校林活動・学校環境緑化コンクールで常磐南小学校が学校林活動で、男川小学校が学校環境緑化でそれぞれ特選校(日本一)に選ばれた。

共に来る、五月二十二日、石川県で開かれる第三十四回全国植樹祭の席上で表彰される。

常磐南小の学校林活動は、将来校舎建設に利用しようと山林○・七八ヘクタールを借りたことに始まる。この山林を利用し、「自然は友だち」のテーマのもとに、動植物の観察、採集、写生会など学校林を教科学習の場として活用しているほか、間伐や枝打ち、シイタケ栽培などを通して勤労体験学習にも役立てている。

男川小は、「土に親しみ、みどりに学ぶ」をテーマに昭和四十八年から学校緑化に取り組んできた。中でも「ふるさとの森」は、九つの通学団ごとに「弥生の森」「街道の森」「日本の森」など特色ある森をつくり、教科学習に活用しており、児童たちの自然愛護、郷土愛の育成に役立っている。

岡崎市内から学校林活動の入賞は今回が初めてである。学校環境緑化の日本一は十四校目にあたる。

なお、前南中校長神谷四士保氏には、永年にわたる学校緑化活動の功績で国土緑化推進委員会理事長から協力賞が贈られる。

■緑化推進委に朝日森林文化賞
第一回朝日森林文化賞の環境

- 【寄贈刊行物・資料等】
- ◆折り折りの記(四) 城南小学校 新書判 一一八ページ
- ◆明日を拓く生活指導(第18集) 生活指導部・愛護センター A5 五六ページ
- ◆おいだいらの子(ふるさと文集48号) 生平小学校 A5 一七一ページ

- B5 高学年用、低学年用
- ◆ふる里みあい 美合小学校 変型B5 一一二ページ
- ◆おかざきのむかしばなし 岡崎の昔話編集委員会 変型B5 一一八ページ
- ◆笹 鳴 矢作中学校 A5 一七一ページ

緑化の部で小中学校環境緑化推進委員会が、奨励賞を受賞し、去る四月二十七日、朝日新聞東京本社で表彰された。

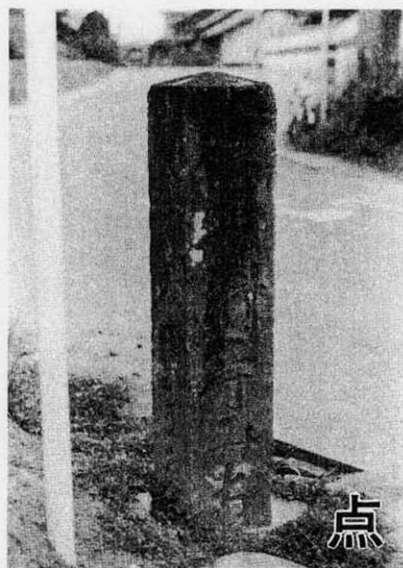
■昭和五十八年度学校訪問
▽県教委指導訪問
●義務教育課 本宿小・南中
●教職員課 上地小・矢作中
●保健体育課 六名小

▽市教育委員訪問
五月 男川小・美合小
六月 岡崎小・六ツ美北部小
七月 三島小・竜美丘小
九月 生平小・常磐南小
十月 奥殿小・矢作北小
十二月 城南小・六ツ美中
一月 甲山中・美川中

▽市教委指導主事訪問
小学校十三校・中学校四校

■昭和五十八年度研究発表表校
▽5/20・香山中 〓「気づき考え実行する生徒の育成」(青少年赤十字活動)
▽6/10・連尺小 〓「見つめ見ぬく力を育てる学習指導」(社会・理科・図工・書写の授業を通して)
▽6/21・岩津中 〓「心のふれあいを深める教育活動」(教育全般)
▽9/20・藤川小 〓「自ら学ぶ子の育成」(考える力を育てる社会科・理科学習)
▽9/27・葵中 〓「自律と感動の教育」(学習指導と生活指導の一体化)
▽10/7・緑丘小 〓「感動ある授業の創造」(子供の「表現」を重視して)(社会科・理科)
▽10/18・梅園小 〓「子どもがつくる授業」(国・社・理・音)
▽10/28・細川小 〓「自ら調べ磨き合い生きる学習の建設」(社会科を通して)(愛社研)
▽11/8・矢北中 〓「教育機器を利用した指導計画の検討と指導法の工夫」(文部省)
▽11/15・大門小 〓「板書を重視した授業の展開」
▽11/25・福岡小 〓「子どもらしい生き生きとした表現のある学習をめざして」(児童詩の鑑賞と創作指導を中心として)

- 昭和五十八年度**
岡崎市小中学校長会役員
▽会長 岸田達夫(三島小) ▼
副会長 荻野富義(梅園小) 浅井俊一(甲山中) 大原和之(竜海中) ▼
監査 太田憲吾(大樹寺小) 犬塚錠治(美川中) ▼
庶務 内田松夫(広幡小) 柴田正(福岡中) ▼
会計 柴田清(城南小) 栗田昭夫(矢北中) ▼
計補佐 伊沢昭(矢東小) ▼
議員 長嶋利一(連尺小) 沢田昇(根石小) 鈴木依治(竜美丘小) 杉田富貴男(岡崎小) 山本昇(六名小) 角谷米三(細川小) 細井浩平(矢北小) 富田丈三郎(井田小) 伊豫田照和(六北小) 高橋孝(岩津中) 藤井清(城北中) 大賀真一(葵中) 星野美(東海中) 鈴木和夫(矢作中)
- (小学校長会)
▽会長 荻野富義(梅園小) ▼
副会長 長嶋利一(連尺小) 沢田昇(根石小) ▼
監査 太田憲吾(大樹寺小) ▼
庶務 内田松夫(広幡小) ▼
会計 柴田清(城南小) ▼
計補佐 伊沢昭(矢東小)
- (中学校長会)
▽会長 浅井俊一(甲山中) ▼
副会長 大原和之(竜海中) 藤井清(城北中) ▼
監査 犬塚錠治(美川中) ▼
庶務 柴田正(福岡中) ▼
会計 栗田昭夫(矢北中)



所在地一岡崎市井田町

道標・大樹寺みち

鴨田町荒井山九品院の東五十メートルほどにある名鉄荒井山バス停横に、約一・二メートルの道標がある。碑には、大樹寺方向をさして「大樹寺みち」、井田(リコー時計工場前)をさして「おかさき江」と刻まれている。建立は碑文から天保四年(一八三三年)と読み取れる。

道標北の道路は、岡崎と東加茂郡大沼方面を結ぶ主要地方道路であり、昔から人々に「大沼街道」と呼ばれ親しまれたものである。最近では、道路も拡張され、県営グラウンドや滝団地にも通じている。

岡崎市史六巻の絵地図には、大沼一田代一外山一小丸一安戸一米河内一滝村一百々村一鴨田を結ぶ街道があり、鴨田からは二分に分かれ、一方は大樹寺、他の一つは井田・伊賀方面へとつながり、岡崎城下に入っていることがわかる。

「三河国額田郡誌」によれば、明治十二年(一八七九年)のこの一帯の村人口は、鴨田三六九人、大樹寺一〇五人、東阿知和二〇六人、井田五四八人、滝一八八人、上里一九四人、井ノ口一四九人である。宅地化の進んだこの周辺の変貌も著しい。

●カ
ツ
ト
根石小

国
島
有
子

この本を

- * 思考の整理学 外山滋比古 780円
筑摩書房
- * 教育とは何かを問いつづけて 太田 堯 430円
岩波新書
- * 学力とは何か 中内 敏夫 430円
岩波新書
- * 忘れ得ぬ人 忘れ得ぬこと 川口松太郎 1,400円
講談社
- * 俳句私見 山本 健吉 1,300円
文芸春秋
- * につぼん博物誌 井上ひさし 980円
朝日新聞社
- * 空気の教育 外山滋比古 950円
福武書店
- * あなたが家族を愛せるのなら 中沢 正夫 930円
情報センター出版局
- * 父から子に語る 憲法のはなし 松浦 基之 980円
みずち書房
- * 最後の海軍大将井上成美 宮野 澄 1,300円
文芸春秋

「遅いなあ、まだ出ないのかな。」〇先生に学年の仲間が催足をする。「まいった。まいった」と言いながら、〇先生はかり切りを続ける。四月から毎週一回、輪番で学年通信を発行することになった。題名は「よいしょ」。子どもと保護者と教師が一体になりがんばろうという願いがこめられている。連携前進。

新緑。その彩りの千差万別は、まさに驚嘆に値する。自然は、一樹一樹ごとに自分の翠を主張している。人は、人として生まれる。個性尊重は誰しも願望むところなのに、ともすれば画一的に扱いたがるのはなぜか。みかけの成果を追った十把一からげの扱いが恐い。



明日に夢を託した青春のころ——衣食貧しく、書物を購うのも容易でなかった。衣食足りて礼節を知る——何はさておき、食を求めて奔走した戦後が過ぎ、暖衣飽食が日常化したいま、礼節や如何飢えのないところには、求道もなければ、学びもない。いま、私は何に飢えているのか。教師像を考える。

睡眠といえは、「春眠暁を覚えず」とよく眠り、よく食べ、よく飲み、夜遅くまで友と論じ合うのが、学生時代であった。そこに人として成長していく糧を見つけてきたように思うが……。個室に籠り、机に向かっていればよしとする、ひとりよがり、他を顧みない人間を育てているのではないだろうか。